

我が家の 3匹のお嬢様



苫小牧市医師会 豊田 健一
とよた腎泌尿器科クリニック

新年あけましておめでとうございます。自分では意識しないものの、2月に還暦、60歳を迎えます。医学部を卒業して、早35年を迎えようとしております。岩手から札幌に来て、学生時代を過ごし、学生時代はアイスホッケーに明け暮れていました。卒業後、泌尿器科医として大学や関連病院を異動し、苫小牧市立病院に転勤になり、その後、2006年7月に、泌尿器科と透析のクリニックを開業しました。12年半一人態勢でしたが、2018年11月からは鈴木先生(元KKR札幌医療センター)に来ていただくことになり、現在は、2人態勢で外来と透析ができるようになり、クリニックの戦力は充実してきました。

さて、我が家には、3匹のメスのポメラニアンがいます。友達がいじめられたのに刺激されて、病院を始めたときに1匹目(エル:オレンジ)を買いました。お店の開店記念セール犬でした。ちよろちよろと後をついてきて、踏みつけそうになったりするので、首に鈴を付けていたのを思い出します。その後、1年して2匹目(クララ:オレンジ)。この子は、お店でひとめぼれして買いました。エルと一緒にしていたら、エルがストレスから血便が出まして、動物病院に行ったら「2週間くらい離して飼ってから一緒にして」と言われました。その後は落ちついて、2匹とも病気もせず元気でしたが、2年ほど前からエルが好酸球肺炎で少量のステロイドを使用中で、クララは僧帽弁閉鎖不全で、心負担軽減のため内服中です。3匹目(テン:黒ポメ)は、病院の10周年記念犬です。散歩のとき、服のポケットに入れていました。3匹それぞれ特徴があり、とてもかわいいです。帰宅時は玄関に入ると3匹でお出迎えるし、朝起きると、クララとテンが階段を上がってきて、おはようと挨拶します。もうほんとにかわいくてしょうがないのですが、先日、クララが心臓の状態が悪くなり入院しました。意識がなくなったのです。利尿剤を使い、心負荷を取り、一命はとりとめましたが、自分の子供を見ているような感覚で、とても心が痛みました。実際、死んでしまったらと思うと、やりきれない気持ちです。でも、今後、愛犬の死に3回会うことになるのですから、先が思いやられます。

子供たちが離れていくと、変わってペットが相手をしてきています。病気持ちではありますが、少しでも長生きして、私たち夫婦を和ませてくれることを祈りたいです。

リュックおじさん



石狩医師会 橋本 透
いしかり脳神経外科クリニック

昨年1月から月1~2回程度、東京・大阪方面の会議に出席するようになりました。最初は肩掛けバッグでの移動でしたが、会議の資料がやたらに多くて重たく閉口していました。遠方からの出席者を見渡すと、多くがリュックサックを背負い全国から参加していました。リュックは学生と登山者が使うものという勝手な偏見を捨て、早速ホームセンターで購入しました。多少の気恥ずかしさに耐え、3月に無事リュックデビューを果たしました。

これがとても素晴らしい。荷物がとても軽く感じるし、両手が使えるのでトイレも“楽チン”に済ませることができます。まさにリュック“様様”でした。

しかし事件(?)は5月、大阪に出張した地下鉄ホームで起きました。いい歳のおっさんがリュックを前にかけている光景を初めて目撃しました。「なんだコイツは?」。初めての体験に私の頭は混乱しました。この姿は、抱っこ紐で赤ちゃんを抱くママの姿ではないのか?(たまにパパも見ますが)。初老おじさんの勝手な偏見は、事実を理解できないまま札幌に帰ってきました。

その後、何度も札幌の地下鉄にりましたが、同じ光景に出会うことはありませんでした。しかし、その後東京出張の際にも、リュック前抱えおじさんを見かける機会が増えてきました。ひょっとして、自分の知らないうちに「リュックは前に抱えるもの」文化が当たり前になったのかと、疑心暗鬼の日々が続いていました。

そしてある日、地下鉄の張り紙に愕然としました。「地下鉄・バスに乗ったら、リュックは手で持つか、前に抱えてください」とのことでした。「ガーン」。公共交通機関ではリュックを背負っていても、マナー違反だったのだ。これからもリュックのお世話になるには「背負うもの」から「前に抱えるもの」という現実を受け入れなければならないのか。

悩んだ末、意を決して三十路の娘に聞いてみました。「リュックを前に抱えるってどう思う?」。答えは明快でした。「いいんじゃない。でもお父さんは似合わないよ。腹は出てるし、首はないし、ダメじゃねー」。そんなことはないのではと、一縷の望みを抱き、リュックを前に抱えて鏡の前に立ってみました。…似合わない、というよりキモい。娘の観察眼は100%正しかったのであります。今年はどうやってリュックに付き合おうかと、悩む日々が続いています。

正月早々、どうでもいい話でした。